
ぶらっちなむ・ボーイズ

ほっし～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶらっちなむ・ボーズ

【Nコード】

N4159E

【作者名】

ほっしー

【あらすじ】

「きやあああああ！」「うわあああああ！」陽射しが焼けるような暑い夏。「何よ！奈津かと思ったじゃない！」「いや、、、奈津ですけど」「何してんのよ！こんなところで！」「いや、、、ここ僕の部屋ですけど」突然知らされた大好きなスキー場の閉鎖。地元の川に現れた真っ白な巨大魚。魚の消えた川。真っ二つに割れた地元の町。冬少年（27歳だけど）達は、全てをあの頃に戻すため、起死回生とんでもない作戦を決行する。

プロローグ（前書き）

恋愛小説かけなくてごめんなさい（<―>）アハハ

ブローグ

「てめえ奈津――真面目にやれー！俺が喰われんだろうが――！」

「こここれで目一杯だよーお」

僕の名前は熱海奈津。海と川と山に囲まれたこの町で、27年間平凡に生きて来た。

これから先も平凡な人生と思っている。相当余程の事がない限り。

だが起きた。

余程の事が。

マリンジエットを操り、猛スピードで水上を疾走する奈津。

そして、マリンジエットから伸びる一本のロープ。そのロープに引っ張られ、梅男は水上をバウンドするように勢い良く滑る。

両足には板を装着。世間一般で言われている、ウエイクボード。

ただ世間様のウエイクボードとちょっと違うのは、梅男のすぐ後。

梅男から5メートルほどの距離、水中からぴったりと梅男をマークしている白い物体。

「奈津ー！面舵いっばいだコノヤローー！」

「え、え？面舵って、どっち？！」

「面舵ったら面舵だばか！それでも漁師の息子か！」

少なくとも、奈津の知ってる漁師の中で 面舵いっぱい、と操舵する漁師はいない。

その様子を岸で見守るしかない富田、紺、晴の三人は、白い物体が梅男に迫る度に奇声をあげている。

「ふあ！」

「きあ！」

推測するに、

早く逃げて！

の意味。

拭う間もなく水飛沫が顔に吹き付けてくる。

耳をかすめる風邪なんて、もうびゅんびゅんいつてる。

歪んでいく視界の中で、奈津は自分の頭の中を肩越しに覗き込むように記憶を辿る。

思えばそう、あれがすべての始まりだったのかもしれない。

登場！！人物

奈津 なつ

主人公。家業の漁師を手伝いながら、地元の町で毎日を過ごす。気が小さく、いつも自分の意見を言えないでいる。

梅男 うめお

奈津の幼馴染。自分の意見は絶対に曲げない超自己中ファイター。人間離れた身体能力の持ち主。夏の間は家業の海の家を手伝っている（夏以外の時期は謎）

富田 とみた

小太りだが実は5人の中で一番運動神経が良い。いつも梅男とオチのない話を繰り返している。奈津とは幼馴染。家業の寿司屋を手伝っている。

紺 こん

口数は少なく一見クールだが、実は人一倍熱く目立ちたがり屋。そのため見栄っ張りで女の子に目が無い。奈津とは幼馴染。家業の民宿を手伝っている。

晴 はる

奈津の幼馴染。俗に言う優等生。大人びていて、いつも頼られる存在。家業の花火師を手伝っている。

満里 まり

奈津達が毎年冬にお世話になっているペンションの娘。さっぱりした性格のため、あまり女扱いされない。

那美なみ

他界した父の後を継ぎ、奈津達が住む町でマリンショップを営んでいる。

信しん

奈津の父親。漁師を営む。

明あきひ

真里の父親。ペンションのオーナー。

タカ

奈津の幼馴染。地元の町で釣りをこよなく愛する。

将一まさかず

ゴツイ体と強面の見かけによらず、生き物全般を大切にしている。タカと同じく釣りを通じ地元の川を愛している。

選手！！宣誓

「今年もー、晴天にー、恵まれー」

良く耳にするようなお決まりの挨拶が聞こえてくる。

「今年もー、って。去年は猛吹雪だったじゃねえか」

きれいにとは言えないが、縦に整列する5人。その一番後ろに並ぶ梅男が、前の人間に話しかける。

身長185cmある上に、立派なアフロが繁茂している為前の人間にちよつと話しかけただけで非常に目立つ。

「真っ白で何も見えなかったよね」

梅男に後ろから話しかけられ、若干体を反らせながら返事を返す富田。

ゆとりのあるスノーボードウェアを見に纏っている為、本人も気になっっている小太りの体型は隠されている。

「富田、鼻水がつららになってたよな」

「それは梅男でしょ」

「は？俺じゃねえよ。お前だろ」

「俺じゃないって」

押し問答を始めた梅男と富田。

壇上の上ではさつきとはまた違うお偉いさんが退屈な挨拶を始めるところだった。

神経質そうにスノーボードウェアのズボンの裾をしきりに気にしているのは、富田の前に並ぶ紺。なかなか思うように決まらないらしい。

「晴、どっちがいいかな」

紺は前に並ぶ晴を呼び、ズボンの裾の左右を交互に見せる。

「右の方がいいかな」

「やっぱり？俺もそう思う」

正直どっちも同じに見えたが、大人な晴はちゃんと答えてあげる。

季節は冬。ここは信州のとあるスキー場。辺りは雪に覆われ、白一色の雪景色。

山の中腹から見下ろす景色は、一見すると焦点が合わない程の距離にあり、ピントをあわせれば雄大な景色を眺めることができる。

そんな美しい景色とは多少不釣合いな、けたたましい破裂音が鳴り響く。

ずん ずん ずん

上空には体の中心まで届くような轟音で、音だけ花火が打ちあがる。そう、運動会の時のあれである。

列の先頭の奈津は、打ちあがるその音だけ花火をぼんやりと見上げていた。

「そろそろ始まる時間だね」

満里は時計を見ながら言う。時刻は午前11時。

「ああ」

満里の問いに短く答える明。満里の父親であり、スキー場の麓にあるペンションのオーナーだ。

忙しい午前の仕事を終えた二人は、ペンションの喫茶室でカウンタ―を挟んで向き合い、ひと時の休息をとっていた。

「今年は勝つかなあ」

頬杖をつき、満里は焦点の定まらない目をしながら宙を見る。

「さあねえ」

明は慣れた手つきでコーヒースイフォンの手入れをしている。

「奴らは元々勝負にこだわってないから」

「だね」

満里は明の後ろに飾ってある写真に目を移す。

写真には、5人の男たちが笑顔で肩を組んで写っている。写真は額にいれられ、黒のマジックでコメントが書かれている。汚い字。

「2008俺達の冬」

奈津を中心として右側に梅男と富田、左側に晴と紺。雪が降っていたのか、頭や肩に雪がうつすらと積もっている。

「ほんと、子供みたい」

5人の頬は寒さで赤く染まり、その中の2人、梅男と富田の鼻からは鼻水がつららのように垂れていた。

整列している選手達が、鼻水だとかズボンの裾だとか、どんなにくだらないしゃべくりをしていても開会式は進行していく。

奈津達の隣に整列しているもう一つの参加チーム「Dragon Boys」の5人は、梅男達の雑音を甚だ迷惑そうにしているが。

「選手、宣誓」

選手宣誓のアナウンスを受け、Dragon Boysの列の中から、1人が壇上に向かう。スノーボードのブーツを履いているから口ポツトみたいな歩き方になる。

彼の名前はアキ。上下カーキ色に揃えたウェアで、開会式用にセツトされた壇上へあがる。整列している選手達と向き合う格好となる。壇上の中央にはマイクが立てられており、その右側にアキが立つ。

「奈津！・・・奈津！！」

晴が前に並び奈津を呼ぶ。

「ん？」

我に返った奈津は、晴を見る。

「宣誓！」

壇上を指差して晴が一言。

奈津は晴の指差す方向を見る。壇上では、アキが1人立っている。

一瞬間をおいた後、奈津は慌てて走り出した。

「また出た。奈津の天然ボケが」

紺は壇上へ慌てて走っていく奈津の後姿を目で追う。

晴は渋い顔をしながら首を左右に動かすだけだった。

「V6」

「TOKIO」

「忍者」

「言っと思った」

晴と紺の後ろでは、梅男と富田が古今東西ジャニーズグループ
a h!! を始めていた。

冬になると、広大な大地を包み込む柔らかな雪。だが、そのふわふわの雪は踏み固められると一転して氷のようにツルツルになり滑りやすくなる。

この開会式場も、会場設営などでスタッフが往来することにより踏み固められ、例外なくカチカチのツルツルとなっていた。特に壇上周辺。

スタッフが「気をつけてね」と声をかけようとしたその瞬間。鈍い金属音が会場に響き渡った。

ごうんっ。

「SMAP」

「マツチ」

「ピンはダメでしょ」

「なんで？」

「グループじゃないじゃん」

「CD出してればいいんだよ」

「だめだつて」

「モノマネするから許して」

「だめだつて」

「きつたまちるか？どの」

「似てないよ」

最高潮を迎える梅男と富田の古今東西。

すっ転んで壇上の階段に頭を打った奈津は、額から大量に出血。その手当てのため、開会式は一時中断された。

「ほんとに大丈夫なのか？君」

「あ、はい。大丈夫です」

大会スタッフに入念に確認をされたが、奈津はそう答えた。小心者の運命。奈津は、仮に骨折をして脂汗を流しながらでも同じ答えを返すだろう。

包帯とネットを巻かれ、見舞い用のメロンみたいになった頭で壇上にあがった。開会式、再開。

壇上の上で見舞い用メロンが手を上げる。隣に立つアキもそれにあわせて手を上げる。

そして、選手宣誓は始まった。他ではなかなか見られない最高の選手宣誓。せーの。

「われわれは！」

「宣誓！」

交互に言うところ、同時に言っちゃった。

本番！！開始

「ただいまより、ハーフパイプ団体戦、決勝を始めます」

間延びしたしまりの無いアナウンスが鳴り響く。

最高の選手宣誓を経て開会式を終えた選手達は、それぞれにスノーボードを抱えフィニッシュ地点からスタート位置へぞろぞろと斜面を上がっていた。

今日はシーズンを締め括る恒例のハーフパイプ団体戦。

スタート地点に揃った出場チームの選手達。総勢2チーム。その人数、全10名。

なんのことはない、参加チームが2チームだけだからいきなり決勝戦。

流行らないスキー場の、流行らないイベントの悲しい運命。

参加するメンバーの顔ぶれも毎年変わらない。そのため、もはや私戦となっている。

戦績は過去8年で0勝8敗と奈津達は大きく負け越している。

負け越しと言うか、一度も勝ったことはない。もともと勝敗にこだわってはいないのだが。

ハーフパイプ競技は、左右の壁を振り子のように行ったり来たりを繰り返して、スタートからフィニッシュ地点に辿り着くまでに5回から6回空中に舞い上がり技を繰り返す。

採点ルールは大会により異なるが、ここのルールはシンプル。

高さ、回転、かつこよさ の3つをそれぞれ10点満点で採点、合計点の多い方が勝ち。その勝数を競うルールである。

一番手は梅男。

スノーボードに限らず、このメンバーでいつも先陣を切るのはこの男。

カラオケも、ファミレスの注文も、お食事会（合コン）の自己紹介も。

だが、スタート地点に梅男の姿は無い。

「お姉さん、もうちょっと下がった方がいいかも」

紺がスタート位置に立っているミニスカートのキャンギャルにやさしく声をかける。

「あ、ごめんなさい」

キャンギャルは愛想を振りまきながら、紺に言われたとおり一步下

がった。

そもそもなんのためにキャンギアルを配置しているのか、なんのために3月の終わりとは言え雪が地面を覆うこの季節にミニスカートなのかわからない。

風の噂で伝え聞いたところによると、大会主催者の意向だとか。

梅男を除く4人はスタート地点で腕を組み、じつと前を見据えている。

まるで、この後に起こる一瞬の出来事を見逃すまいと待ち構えているように。

ふと、どこか遠くから獣か何かの雄叫びが聞こえてきた。耳を澄ますと、どうやら山の上の方から。

春の気配を敏感に感じ取り山へと戻ってきた鳥達が、これまた不穏な空気を敏感に感じ取りそれまで羽を休めていた木の枝から慌しく飛び立つ。

雄叫びは徐々に近づいてくる。

スタート地点から斜面上を見上げると、ウェアをはためかせ直滑降で滑り降りてくるスノーボーダーが見えた。今ようやく米粒大。

「あ”――!!”」

ライダーがぐんぐん近づいてきてその大きさが小豆大になる頃には、その正体が判明する。

その猛スピードのため発生する風圧に、これっぽっちも屈すること無く繁生する丸い植木のような立派なアフロ。梅男だ。

「い”――!!”」

トップスピードに乗ったまま、スタート位置に立つ奈津達4人と、ニコニコしながら立ってるだけのキャンギアルの間を通り抜ける。ギャン！

梅男が猛烈な速度で通り過ぎると、一瞬遅れて吹き付けられる風圧でその短いスカートがめくれあがる。

「キャン―!!」

キャンギアルは両手でスカートを押さえたが、一瞬遅かった。

奈津達4人は腕を組む姿勢は変えず、顔の向きだけキャンギアルに向けていた。さっきからの凝視の狙いはこれ。

「黒―!!」意表を突かれて叫ぶ富田。

「そのギャップにGAPのキャップを！」インチキ早口言葉を始める紺。

「モーレツ」ゆっくりと首を左右に振りながら晴。

「ななな、なんかのCM？」呂律が怪しい奈津。

色めきだった4人は興奮気味に好き勝手言ってる。

毎年恒例、一足早いいたずらな春一番。

「元氣108倍ー!!」

梅男が両手を突き上げ咆哮すると、猛スピードでハーフパイプに突っ込んでいく。男は煩惱の数だけ強くなるのだ。

「わーん！」

最初の掛け声で梅男は勢い良くハーフパイプに身を落とす。

「つーー！」

掛け声その2、でハーフパイプの底を低い姿勢で踏ん張り加速していく。ぐん！

「わーーん!!」

最後の掛け声で、体格に恵まれた梅男の体が空中へ飛び出した。

「スリーじゃないのかよ」

富田が遙か上空に舞い上がった梅男を見上げる。

「今年はどこまで飛ぶかな」

額に手をかざし、太陽光線を遮りながら晴。

空には目に痛いくらいの青空が広がっている。

特大ジャンプが放物線の頂上に達すると、梅男は空中で両手両足を大きく広げて叫んだ。

「ばーん！」

こちらも毎年恒例、人間打上花火。

世界は広い。人類は偉大だ。

冬の火花だって、大空を鳥のように飛ぶことだってこうして実現できるのだから。

通常だったら空中に飛び出す瞬間、踏み切りを誤らなければ自然とハーフパイプの壁に戻る。

しかし、梅男の場合スーパーな速度から生み出される高さと未熟な踏み切り技術のため、この大会では一度も壁に戻ったことがない。

今回もその軌道は本来戻るべき場所からは遠くかけ離れ、ハーフパイプの壁から横に大きく外れたちよつとした崖に向かっている。

雄叫びをフェードアウトさせながら、梅男は崖の下へと消えていく。

そして、数秒送れて轟音が響く。

ずどーん。

最後の夜

結果から言つと。

梅男× - 鈴木君
富田× - 佐藤君
紺× - 山田君
晴 - ×高橋君
奈津× - アキ （奈津負傷棄権）

晴が一矢報いた形だが、1勝4敗。

一番手の梅男から始まり、富田、紺が立て続けに負け、第4戦を待たずに勝敗は決まっていた。

バラエティ番組としては、非常にやってはいけないことだ。

「最後の人が勝つたら3ポイントとかやったら盛り上がるのにね」などと富田が勝手なことを言っていたが、これは3流とは言え青春小説という文学でありバラエティではない。

やっていることはバラエティのなんら変わらなくても、活字として表現しているので誰が何と言おうと文学だ。

兎にも角にも、こうして「2008年俺達の冬」は、奈津達の9連敗というかたちで幕を閉じた。

出番直前に開会式での傷口が開き、またも流血騒ぎを起こした奈津

には救急車のお出迎えというおまけ付きで棄権となった。

抜けるような青空を、風に流され颯爽と流れていく白い雲。彼らは我々に何ら言葉をかけることなく山の向こうへと消えていく。

そんな雲と同じように、季節と言うのは人知れず、そしていつの間にか移り変わっていくものである。

奈津達が冬の間滞在しているペンションは、桃竜温泉街の一角にある。

大会が行われた桃竜山スキー場からは、歩いて10分ほどの距離。オーナーに教えてもらった裏道を滑って降りてくれば、ものの数分で到着してしまう。

暖かいオレンジ色の照明にライトアップされたその建物は、青く塗装が施され南国ビーチのほとりの方が相応しいように思える。

「ちょっと奈津、元気だしなよ」

満里が奈津の背中に向かって言った。

奈津はペンションにある喫茶室のカウンターでがっくりとうなだれている。

昼間の怪我で顔全体を包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「んん。。。」

一応返事はするものの、間の抜けた声を発しながらカウンターに突っ伏したままの奈津。

「たいした怪我じゃなくてよかったじゃない」

3針縫って全治3週間の診断。充分大した怪我だと思っただけど。

「うん。。。」

「もう。荷物まとまったの？」

「・・・まだ」

「明日出発でしょ。待たせたらまた置いてかれるよ」

「う。。。」

何年前か前、もたもたしている奈津は本気でおいで行かれたことがある。

みんなはわざとじゃないと主張しているが、わざとじゃないとしてもそれはそれでひどいことではないか。だって存在を忘れてたってことでしょ。

今の時刻は夜の10時ちょっと前。他の4人は明日の出発に備え早々に布団の中へと潜ってしまっている。

奈津はカウンターを立ち、カフェの出口に向かった。

「あ、奈津」

「ん？」

呼び止められた見舞い用のメロンは、立ち止まり満里の方を振り返る。

ぽっぽっ　ぽっぽっ

鳩時計が丁度夜の10時を指し、時計から鳩が出てきてその刻を告げる。

ぽっぽっ　ぽっぽっ

満里はその場に立ち上がっただけで、何も言わずに奈津を見つめている。

ぽっぽっ　ぽっぽっ

奈津も満里の言葉を待つ。

ぽっぽっ　ぽっぽっ

「奈津さ」

「うん？」

ようやく満里が口を開く。

ぽっぽっ　ぽっぽっ

鳩時計の鳩は役目を終えると、またもとの場所に引っ込んでいく。

お互いが見つめあつたまま刻は流れる。

「見舞い用のメロンみたいだね」

「寝る」

奈津は喫茶室を出て、4人が寝静まる自分の寢床へ向かった。

「奈津、起きてる？」

奈津は布団に入ると、いつの間にかウトウトしていたらしい。

名前を呼ばれて はっ と目を覚ます。

「寝ちゃった、かな」

「ん、、、満里？」

顔をあげるとドアのところに満里が立っている姿が暗闇の中ではんやりと見えた。

両サイドにはいびきをかいて寝てる梅男と富田。

「ちっきはぐめん」

若干つつむきながら満里が言う。

満里に謝られた記憶など数えるほどしかない。寝起きでぼんやりとした頭だが、いつもと違う雰囲気にとまどいながらも奈津は何とか答えようとする。

「いや、別に気・・・」
「んがー！」

梅男のいびきに遮られる。しばらく見ていたら、寝返りをうって大人しくなった。

「何？」

「あ、うん」

満里にいつもの歯切れの良さは無かった。

「明日でお別れだね」

「まあ、うん」

お別れと言えばお別れだけど、これまで毎年あっさりさっぱりお別れしてきたではないか。

今の時刻はわからないが、一旦寝入ったところから、夜も結構更けていると思われる。

暗闇の中で目を泳がせながら動きの鈍い頭を働かせる。が、何の考えも言葉も出てこない。

またしばらく沈黙の時間が流れる。

明るいと眠れない、と梅男の意向で部屋は真っ暗。

今部屋を照らしているのは満里が開けたドアから漏れてくる廊下の小さい灯りだけ。部屋の暗さと廊下の照明で逆光となっているため満里の表情は読み取れない。

「あたしね・・・」

「ぐがー!!」

ほんとは起きてるんじゃないだろうか。しばらく富田を見ていたら、梅男と同じく寝返りをうつて大人しくなった。

富田の様子を伺い、再び満里が口を開こうとする。

「ずっと・・・」

「これこれ！これが食べたかったんだよ!!」

今度は梅男の寝言。どんだけ長く明確な寝言なんだ。

しかも何かを指差して言っている。

今度こそ満里は吹き出してしまった。

それと同時に、張り詰めて別人のようだった満里の周りの空気が変わった。いつもの満里だ。

「起こしたら悪いね」満里が声をひそめて言う。

「いや、」

叩き起こしても起きない連中なんだけど。

「起こしてごめんね。また今度話すよ」

「あ。。。」

また謝られた。満里にこれだけ謝られると、雪でも降るんじゃないかと、、あ 雪は平気で降ってるかも。

「それじゃ、おやすみ」

それだけ言うと、顔だけを布団から起こしている奈津を残し、満里は静かにドアを閉めた。

ぱたん。

ぱたん。

奈津はドアの閉まる音で目を覚ました。

喫茶室から戻った奈津は、布団に潜り込むといつの間にか眠りについていたようだ。

ドアの曇りガラスを見る。高さも大きさも人間の顔ほどだ。

先ほどの出来事を思い出す。ドアは閉じられていて、満里もいない。廊下の照明は切られているのか、曇りガラスの向こうは真っ暗で、人の気配はない。

「がー」

「ぐがー」

夢。。。か

梅男と富田は騒音のようないびきを撒き散らしている。思えば、よく何ヶ月も同じ部屋で寝られたものだ。

二人の幸せそうな寝顔を見ていると、なんだか無性に腹が立って来る。

起きているときには絶対に出来ない。だが、寝ているときには何でも出来る。

奈津は梅男と富田の顔面に、一発ずつ自分の枕を叩きつけた。

ばふっ。ばふっ。

ばいばい！！冬

荷物をまとめた5人と満里は、朝食を済ませて喫茶室のカウンターに横一列に並んで座っていた。

毎年、出発前に明の煎れるコーヒーを飲むことになっている。

座る順番も毎年同じで、奥から梅男 満里 富田 奈津 晴 紺。

「やつぱ苦え」

梅男はコーヒーを一口すすると、顔をしかめながらカップを置いた。他の4人も一口すすると、次々とカップを置いていく。カウンターの向こうの明が苦笑いをする。

これも毎年恒例となった儀式。

5人が唯一飲めるコーヒーは、甘い甘いコーヒー牛乳のみ。

「これがいいんじゃないの」

梅男の隣に座る満里はおいしそうにコーヒーを啜る。

コーヒーそのままの味を楽しんでもらうため、砂糖やミルクは置いてない。オーナーである明の意向。

「ちょっと酸味があるのよ。あんたたちにはわからないだろうけど」

「なにおー！生意気な女め」

「このコーヒーインテリ女！」

満里を挟んで梅男と富田が食ってかかる。

「文句があるならちゃんと飲んでから言いなさいよ」

梅男は目の前のコーヒーを睨みつけると、今度はさつきより多めに啜った。

「・・・」

「どう？」富田が興味津々に聞く。

頑固だけど繊細で上品。例えるならばそんな音をたてながら梅男がカップを置く。

「やつぱ苦え。。。」「さつきよりもひどい顔で梅男は言った。

「きやははは！」

奈津は富田越しに満里の様子を伺っている。

また今度話すよ

満里にそんな気配は微塵もなかった。

「オーナー、来年もよろしくお願いしますね」奈津の隣で晴が言う。

「来年？」コーヒードリップの片づけをしていた明の手が止まる。
変な間が空いた。

奈津はさつきから満里のちょっとした変化ほ一つ一つが気になって
いた。先ほどまで元気に笑っていた満里が、今は一瞬身を強張らせ
るように見えたり。

昨夜の出来事で意識し過ぎているのか。

「ああ、来年ね。うん。頼むよ」

「オーナー、呆けないでよ」

「いや、来年の話をすると鬼が笑うってね、はっはっは」

それから5人と満里は時間いっぱいまで話をした。

とりとめのない話ばかりだが、会話が絶えることは無かった。

「オーナー、レモン水ないっすか？」

「ちょっと梅男、いきなりなによ」

「俺は今レモン水を一気飲みしたいんだ」

「レモンって、太陽の味がするよね」

「そうそう。レモンって太陽の果物だよな」

「わからないわ。あんたたちが」

来年また会える。

一時とはいえやっぱり別れなのだ。名残惜しいのだ。

毎日どれほどの言葉を交わしても、寂しくない別れなどないのだろ
う。

ぽっぽっぽっぽっ

喫茶室の鳩時計が鳴った。話を遮られ、みんなが一斉に鳩時計に注
目する。

ぽっぽっぽっぽっ

「うるせえ！」

話を中断され、梅男が鳩時計の小窓から顔を出す鳩に向かって叫ぶ。

ばたん！

わかってるよ、うるせえな。俺だつて好きで鳴いてんじゃねえんだ
よ。と言わんばかりに鳩は１１回鳴き終えたあと、乱暴に小窓を閉
めると時計の中に引っ込んで行った。

明はカウンターに並ぶ６人の顔を見ると、静かに、そしてゆっくり
と言った。

「そろそろバスの時間かな」

この時期になると、陽が出ればじゃんじんと雪は融けていく。

融けた雪は水となり、流れ出る水に浸された道路や駐車場は黒光りをして湯気を立ち昇らせる。

冬の終わり、春到来の光景だ。

ペンションから歩いて5分程のバス発着場。

毎年のように、満里とオーナーが見送りに来てくれる。

「忘れもんじゃないか？」

「荷物よゝし、おみやげよゝし」

梅男の掛け声に、富田が指差し確認を始める。

奈津が置いてけぼりにされた年から、ネタというか一つの儀式のようになってる。

「あれ、梅男隊長、奈津がいません」

「富田隊員、それが奈津ではないか」

「あ、おみやげのメロンかと思っただであります」

「だっはっはー!!」

この二人は何かネタを見つけると、ウケなくなるまで徹底的に追求する。

実際ウケているのは当人だけなのだが。つまり、飽きるまでつてこと。今回のターゲットは見舞い用のメロンこと、奈津。

「はいはい、奈津よろし」

紺が奈津の頭を手のひらでぐりぐりしながら言った。ちょっとだけ傷に触った。いててて。

発着場に東京行きのバスがやってきた。5人は荷物を積み、バスに乗り込んだ。

「あんた達さあ、今年こそ携帯買いなさいよ」

「何で？」

「何で、って。便利じゃない。みんな持ってるわよ」

「みんな　って。俺ら誰も持ってないけど」

「あんた達がおかしいのよ」

バスの窓越しに梅男と満里がやりとりをしている。

奈津はもう一度昨日のリアルな夢を思い出し、明と並んで立っている満里に目をやる。満里と目が合った。

「奈津も、携帯買ったらメアド教えなさいよ」

やっぱり、いつもと様子の変わらない満里だった。

「メアドって、何？」

満里は諦めたような力ない笑顔を見ると、小さく手を振った。

奈津はバスのシートに　ズリズリ　っと深く凭れ掛かる。

時間になり、5人を乗せたバスはゆっくりと動き出す。

もう何回も繰り返されている光景だが、胸にこみ上げてくるこの複雑な感情に慣れることはない。

冬との別れの寂しさと、春到来の希望感が同居する感じ。

「まゝた来年ねー！！」

満里は両手を大きく振ってバスを見送る。

隣の明はさすがに両手をぶんぶん振ることは無いが、別れを惜しんでくれているのはその表情から充分にわかった。

これから自分達が生まれ育った町に戻って、熱くて暑い、本に書いたらぶ厚い夏を過ごすのだ。

これは、そんな冬少年達（27歳だけど）の、夏物語である。

5人は窓から体を乗り出し、元気良く別れを告げた。見送る二人に、

山に、そして冬に。

「まっつったねー!!」

初夏

例年より早く梅雨の明けた初夏。ここは千葉県房総半島にある海に面したとある町。

雪山から戻った奈津達は、去年までと同じように春を迎え、梅雨をやり過ごし、迎えた初夏の日差しの下で毎日をのんびりと過ごしていた。

「あぢ〜しぬ〜」

ピンクのブーメランパンツ一枚、背もたれを倒したビーチチェアに横たわり、梅男は空を見上げながら房総の太陽に焼かれていた。夏になってもやっぱりアフロヘアー。

「ナハハハハ」

こちらは富田。イギリスの国旗をデザインしたブーメランパンツ一枚で房総の太陽に焼かれている。体全体にほんのりと装備された脂肪は相変わらずだ。

二人は全身に塗りたくったサンオイルでテカテカしている。気持ち悪い。

今日は日焼けしにきた梅男と富田。それと、太陽光線を遮るパラソルの下で過ごす奈津、紺、晴の3人がいた。

パラソル下の3人は、木でできた手作りのイスに座ってそれぞれ本を読んでいる。

「お前らさ」

ビーチチェアに横たわり、空を見上げながら纏わりつくような口調の梅男。

「何しに来てんだよ」

「見ればわかるじゃん。ほれ」

紺が気の早いスノーボード雑誌の背表紙を梅男に見せる。

「んなーこたーわかってんだよ」

「なんだよ」

「あらやだー！この人。なんだよ？だって！聞いた？」

隣の富田がちよつと大げさに、そしてちよつとおかまちゃんになりながら驚きの声をあげる。

あらやだー と梅男も続く。

「俺が言いたいのは、夏らしいことをしない奴は家に帰れ！ってことだよ」

「そうだそうだ！帰れ帰れ！」

「そして家でカキ氷でも食ってろ」

「そうだ！そうだ！そしてシロップは練乳だぞ」

「頭キンキンになるまで食べ続ける」

「俺ん家にある『カエルのキョロちゃん力キ氷セット』を貸してやる」

あーでもない。こーでもない。

この町には、ちょうど真ん中から町を南北に隔てるように川が流れており、海岸線から500mほど川を上流に向けて遡ったところにマリンショップがある。

建物は丸太で作られたログハウスで、手作りの看板や屋根に飾られた風を見ない風見鶏などの小物からはちょっとしたセンスを感じさせる小洒落た佇まいだ。

そのマリンショップの敷地には、目の前を流れる川が一望できるようにウッドデッキが施され、奈津達は日常の空いた時間のほとんどをそこで夏らしいことをしたり夏らしくないことをしたりして過ごしていた。

「いつから日本男児はこんなに軟弱ちゃんになっちゃんだろうねえ、梅男君」

パラソル下の3人はとくに相手にしていなかったが、2人の皮肉は続く。

「ほんとだよ、富田君を見習って、、」梅男は顔だけ富田の方に振る。

「って、お前白いよ」

ローストチキンでもこんがり焼きあがるんじゃないかというほどに強い日差しの中、富田の肌は、焼き始めの当初とほとんど変わらず白かった。

「いつまで白ブタでいるつもりだよ。それじゃ日本男児のお手本にならねえじゃねえか」

ブタは否定せず、色の部分だけ富田はサングラスをはずして言い返す。

「梅男もだよ。こんだけ毎日焼いてんのに小麦色の小の字にもなっていないじゃん！」

黒ブタなら問題なかったのかはわからないが、富田の言うとおり梅男の肌の色にも焼き始め当初からほとんど変化は無かった。

「なんだとお！白ブタのくせに！こうして那美さんにもらったオイルをせっせと塗ってだな。。」オイルを見る梅男と富田。

「あの女ゝ！！」

「あの女ゝ！！」

途端にオイルを放り出して事務所に向かって走っていった。

全身テカテカでビキニパンツ男二人組みの突然の乱入に、外房マリンの事務所から短い悲鳴が聞こえてきた。

晴は足元に転がってきたオイルを拾いパッケージを読み上げた。

「今年の夏は焼かない。紫外線から鉄壁ガード」

「もう、アンタ達営業妨害よ」

一騒動起こした梅男と富田をつまみ出すように、外房マリンの事務所兼フロントのログハウスから女が出てきた。

手には緑色の液体の入ったグラス。表面に浮き上がった水滴が涼しげだった。

「だってひでーよ。日焼け止めよこすなんてさー」

「こんがり焼かれるはずだった俺達の時間を返せ！」

梅男と富田が文句を言う。

「ちょっと間違えちゃっただけでしょー。ホラ、それ塗れば問題なし」

梅男が手にしているものは、今度はちゃんとサンオイル。

女の名前は那美。ここ外房マリンの主だ。

へソまで届かないピッタピタの黄色いＴシャツに、腿も露わなデニム生地ホットパンツ。

グレープフルーツを仕込んでるんじゃないかというほどの胸の膨らみと形のいいヒップを左右に揺らし、フェロモン全開。

未だに納得がいかずぶつくさ言ってる梅男と富田を強引になだめ、那美は奈津の元へと歩いていく。

「はい、奈津お待ちませ」

「え、僕頼んだの、ジンジャエール・・・」

ダン！

那美はその言葉を遮るように、奈津の前にトロピカルカクテルの入ったグラスを強めに置いた。緑色の液体がジンジャーエールと異なるのは明らかだった。

「いいからいいから。飲んでみて」

那美は有無を言わさぬその眼差しでじっと見ている。

「大丈夫。サービスよ」

そういう問題じゃ。。。

那美はここ外房マリンドオシャレなBARを始めようと企んでいる。日々オリジナルカクテルの試作を重ね、いつの間にか奈津が実験台となっていた。

その腕前の方はと言うと。

奈津は恐る恐るストローを吸う。

「ぶーっ！」

その液体が口の中に入ってきた瞬間、マンガみたいにすぐ吐いた。

「あ！ひどい」

いつも増して、今日のはひどい。トニックシャンプーにピーマンの種を混ぜた味がした。実際どっちも口にしたことはないけど。

「あたしは好きなんだけどな」奈津から取り上げたグラスのストローを吸いながら、那美は首を傾げながら水滴のついたグラスを眺める。

「ぶええええ」奈津は緑色に染まった舌を出す。

奈津は個性豊かなカクテルを飲まされるたびに思う。

なぜいつもベースがスーサー爽やかなメントールなんだろうか。

那美は程よい感覚をあけ、無造作に並べられた手作りのテーブルに手際よく日よけの parasol をセットしていく。

「アンタ達、他にすることないわけ？」

川では、マリッジットに引っ張られてウェイクボードをしている若者たちが奇声をあげて水面を元気に滑走している。

「なんかつつつてもなあ」そんな若者達を梅男は目で追いかけていく。

「この腹じゃ、、、ねえ」富田も梅男と同じものを目で追いながら自分の腹をさする。

「気になるのか君は」

「やっぱウェットスーツって、体型強調されてやばいじゃんね」

「強調されなくても十分やばいじゃんね」梅男は富田の腹をつまむ。

「夏は夏らしく。冬は冬らしく。ね」富田はビーチベッドに深く沈みこみながら言う。

「夏は遊ぶ時間ですよー」伸びをしながら発した梅男の声は、犬の遠吠えのように外房マリリンに鳴り響いた。

陽が傾き辺りがオレンジ色に染まり始めると、5人は誰からともなくそれぞれの家へと帰り始める。

奈津も川の土手を登り、家に向かう。途中、足を止め後ろを振り返る。

川に反射するオレンジ色の輝きが思ったよりも眩しく、思わず目を細めながらも向こう岸を見る。

桟橋の釣り人達もまた、帰り支度を始めていた。

釣り人の1人がこちらに気付き、手を振ってきた。中学時代の同級生、タカだった。

「ねえ、君のうち漁師なんだって？」

中学校の入学式を終え、新生活の始まった記念すべき日。この町の4つの区域に点在する小学校の生徒たちがひとつの中学に通う。当然、初めて見る顔とクラスメートになり、前後左右の席を知らない顔に囲まれた。

その知らない顔がいきなり後ろの席の奈津に振り向き、しかも家業まで知っている様子なものであるから必要以上に驚き、言葉がうまく出てこなかった。

「え、、、な、なんで知ってるの」

「うちさ、釣具屋やってんだ。君のうちのおやじさんもたまに釣り餌買いに来るんだ」

そうなんだ と答える代わりに首をゆらゆらと縦に振る。

見知らぬ顔が大勢いるのに加え、いきなりの不意打ちに必要以上に体が強張ってしまう。

「ねえ、釣りやるの？」

信に連れられて釣りにはよく行っていた。首を縦に振る。

「んじゃ今度一緒に行こうよ。クラス別になっちゃったけど、よく一緒に行く仲間もいるからさ」

またも奈津は首を縦に振る。今度は大きく2回、3回と。

「俺はタ力。よろしく」

「タ力君」

「タ力でいいよ」

「な、奈津」

「え？」

「。。。奈津」

「なっ？」

今度は小さく首を縦に振る。

「女みたいな名前だなー」

小さな町の中学校は3クラスにわけられ、どういいうわけか奈津以外の4人は同じクラスにかたまった。

そんな不安の中、初日にできた友達。不安はまだまだあったが、これからの新生活に少しずつ胸は膨らんでいった。

奈津はタカへ大きく手を振り返すと、それが帰りの挨拶なのかバケツを持った手を少し上げ、こちらに背を向けて釣り仲間たちと土手を登って行った。

奈津はタカの後姿を見送ると、自分も家へと向かう。と言っても奈津の家は外房マリンから5分とかからないところにあるのだが、家に帰るといつもと違って静かだった。

いつもは父親の信が大声を出して相撲か野球を見ているから、非常に騒々しい。

だが、今日は信の愛車の白いトラックも庭にない。

部屋から漏れる灯りもない。

相撲の場所中にTVの前にいないのは珍しい。どこかへ出かけてるらしい。

静かな家の2階にあがり自分の部屋のベッドに横になる。ほとんど間をおかずに眠気が襲ってきた。

口の中で仄かにメントールの風味を感じ、喉を鳴らして唾液を飲み込むと、体の要求に逆らうことなく深い眠りへと落ちていった。

突然の来客

灯りのついていない暗い部屋をゆっくりと進む。3歩も歩けば窓に辿り着く。

久しぶりだな、ここも。

何の気なしに傍らの勉強机に手を置く。

散らかっているなあ。

雑誌や本が散らばる机。

ちよつとは整理しなさいよ。

散らばった冊子をまとめようと本に手をかけたその時、ベッドの上で何かがゆっくりと起き上がった。

その物影を視界の端に捉えたまま息をのむ。そして。

「きゃあああああああ！！」

「うわあああああああ！！」

のどかな町の静寂をぶち抜くように悲鳴が鳴り渡る。その声にびっくりにした奈津も叫ぶ。

「何よ！奈津かと思ったじゃない！」

「いや、奈津ですけど」

「何してんのよ、こんなところで」

「ここ僕の部屋ですけど」

「いるならいるって言ってよ!」

寝ながら「僕いますよ」って言えばいいのかな。

暗闇の中で数秒見つめあう二人。甘くとろけるやつではなく、早い話がハブとマングース。

薄暗い部屋でお互いの光る目だけを凝視していた。

「なんだなんだ、どうした」叫び声を聞きつけて信がずしずしと二階に上がって来る。ハブとマングースの緊張が解けた。

「なんだ、奈津いたのか。いるならいるって言えばよ」顔を覗かせ、奈津を見ると信はそう言った。

だから、寝ながら「僕いるから」って言えばいいのかな。

「飯できたぞ」

「はい」

ずしずし、とんとん、と二人の足音が階段を降りて行く。部屋には呆気にとられた奈津が一人残された。

テーブルには海の幸を中心に、色とりどりの料理が並べられている。今日は来客を迎えるためだろうか、いつもより見栄え良く料理を盛り付けている。

「今日は鯛とヒラメが大漁だったからよ」

「わゝ、おいしそう！」

目を輝かせながら料理の皿に思い思いに箸を付けていく。

「やっぱり獲れたては全然違うわね」

温海家の食卓は足の低いテーブルを囲み、床に直接座って召し上がるスタイル。

特に空腹ではなかったが、奈津がヒラメの刺身に手を伸ばす。箸と箸がぶつかった。

「あ、どうぞ」反射的に奈津が手を引く。小心者の習性。いつもそうしてしまう自分を情けなく思う。

「ありがとう」

悪びれもせずにながばー！とヒラメの刺身をさらっていく。奈津はヒラメがまばらになった皿と、おいしそうにヒラメをほおばる幸せそうな顔を交互に見て箸をおいた。

「何、もうご馳走様？」

「いつもはもつと食うだろ。たいした仕事もしてないくせに」

来客があっても相変わらずの信を奈津は呆れ顔で見る。身に着けているのも股引に白いランニングシャツ。まったく。客が来ているのに。客が。。。客？

奈津は ぱっ と顔をあげ、その突然の来客を見る。

「何よ」

ここに来て、奈津はようやく満里に聞いたのだった。

「なんでいるの？」

「なんでいるの？」

次の日。奈津は外房マリンにやって来ていた。昨日突然この町にやってきた満里を連れて。当然、4人の反応は声を揃えてこれだった。

「何よ。用がないと来ちゃいけないわけ？」

空には相変わらずじりじりと太陽が照り付けている。

「いや、いやいやいや。来るなら来るって言うてくれればよ」

「連絡したわよ」

梅男の言葉にあっさりと満里が答える。

「うそ？」

「ほんと」

「家に？」

「そうよ」

「俺の？」

「そうよ」

「いつ？」

「1週間前」

「誰が出た？」

「変な子供が出て話にならなかった」

「あははは！だめじゃん梅男ん家」

「富田、あんたん家もね」

「うそ？」

「ほんと」

「電話したの？」

「うん」

「家に？」

「そうよ」

「俺の？」

「そうよ」

「いつ？」

「だから、1週間前」

「誰が出た？」

「猫が鳴いてた」

「お前ん家の方がひでーじゃねーか」

「そんなばかな！」

「晴と紺の家にもね」

「嘘？！」

「嘘？！」

晴と紺が声を揃えて叫ぶ。

「あんた達とは電話で連絡とれないわけ？ 奈津にも連絡いつてないみたいだしさ」

満里の冷たい視線を受け、奈津は小さくなる。

別に自分が悪いわけではないと思うのだが、いつもより3分の2ほど小さくなった奈津は、漁の準備をしてるであろう信を恨んだ。

「あら、かわいいお客さんね」

空では相変わらず太陽がじりじりと照りつける中、那美がトロピカルジュースを手にとってやってきた。

厚い唇、口元のホクロ。絶妙に垂れた目尻とパッチリした目は、世の男子達を甘い気分させる。

「こんにちは」 満里は軽く頭を下げて挨拶をする。

「こんにちは」

「こちら、信州から来た満里ちゃん」 梅男が満里を紹介する。

「あら、うちの店と同じ名前ね」 那美は房総マリンの看板を親指で示す。

梅男は渋い顔で唸った。マリとマリンか。

「丁度よかったわ。飲む？これ」

那美は挨拶もそこそこに、手に持っていたトロピカルジュースを満里の顔の前に出した。今日のは吸い込まれるようにきれいなブルー。

男5人の空気が強張る。丁度よかった の意味を計りかねている。

「あ、はい。喉渴いちゃって。いただきまーす」

「あ、、、」

奈津が止めるまもなく満里はストローに口をつけ、一口二口とトロピカルジュースを飲む。

五人は黙ってその様子を見守るしかなかった。

太陽はいつの間にか頭上高く上り、いつの間にか蝉の声は何重にも重なっている。

それはもはや全方位多重サ라운드。

向こう岸では今日もタカ達が釣り糸を垂らしている。当たりが無いのか、釣り糸を垂らしたままあまり動きが無いのでどかな田舎町の風景がより一層のんびりとした雰囲気となっている。

満里はストローから口を離し、横からグラスを見る。蝉の声が異様に耳障りだった。奈津達は固唾をのんで見守る。

「おいしー！」満里の顔がぱあつと明るくなる。

「嘘っ!？」5人は声を揃えて言う。

「何よ。失礼ねアンタ達」

「すごくおいしーですよ、これ。よかったら作り方教えてください」

「いいわよ。レシピ書いとくから。後で渡すわね」

「きゃー、嬉しい。あたしもペンションで始めようかな」

「あら、ペンションで働いてるの？」

「ガールズトークがはじまった。こうなると男達の出る幕は無い。」

二人の傍ら、奈津が恐る恐るそのトロピカルジュースを手に取りストローに口を付けた。

「ぶー!!」

「リステリンに法曹を混ぜた味がした。」

房総の夏

5人と満里は房総の夏を思いっきり遊んだ。いや、4人と満里、かな。

海に浮かび、波と戯れ、浜を駆け回り、お腹が空いたら梅男の家族が営む海の家で思い思いの食べ物をご馳走になり、疲れたら砂浜に立てたビーチパラソルの下で横になる。

「ね、ねえ」

「いや、房総の夏だねえ」ビーチチエアに横たわる梅男は、奈津の呼びかけに答える代わりに大きく伸びをする。

「房総の夏は日本の夏だねえ」風流だがよく聞くと実はよくわからない相槌をうつ富田。

深い紺碧色の海は緩やかにさざなみ、飽きることなく繰り返し押し寄せる波は地球の鼓動を感じさせる。

人が密集する海辺から少し沖を見ると、晴、紺、満里の三人がゴムボートに乗り静かにうねる波間を漂っている。

「ね、そろそろ出してくれない？」奈津は横になりながら顔だけ梅男と富田の方に向けている。

「なんか、レモンジュース一気飲みしたくね？」

「あ、俺も今そう思ってた」

「レモンって、太陽のフルーツなのかもな」

「絶対そうだよ。だって太陽浴びると飲みたくなるもん」

「おし、一本行つとく？」梅男は勢い良く立ち上がると、海の家に向かつて走り出す。

「マックスも行つとく？」それに続いて富田も少し出た腹を揺らしながら走っていく。

「あ、ねえ、ちょっと！」

奈津が梅男と富田を追いかけようとする。が、2人を追いかけているのはその気持ちと顔だけ。

奈津の叫びは目に痛いぐらいの青い夏の空に虚しく吸い込まれていた。

「きゃー！やったー！」

こちらは沖のゴムボートの上。

晴と満里がパー。紺がチヨキ。先ほどのゴムボート・ジャンケンに負けた紺は、海に入りゴムボートをバタ足で漕ぎ始める。

「こりゃあ、、、」

当分出られそうに無い。

奈津の額を伝って汗が滑り落ち、砂浜に染み込んで行く。

奈津は体の上に覆いかぶさる砂の山で身動きが取れなくなっている。限度というものを知らない梅男達に埋められ、その上には世間でお馴染み青い2頭身の猫型キャラクターが築かれた。

太陽に焼き付けられ、加熱された砂浜を足早に通り過ぎていく海水浴客。

その海水浴客達が通り過ぎる度に、奈津は得体の知れないようなものを見るような目で見られ、時には失笑され、時には子供たちのおもちゃとなっていくのであった。

「奈津、いつまでそこにいるのよ」

満里の声で、奈津は目を開ける。青い空の真ん中に、満里の顔が浮かんでいた。

好きでこんなことしてると思われてるのだろうか。

満里は黄色い生地ヒマワリの絵が施されたビキニを身に付けている。先ほど那美に借りた水着だ。

あのグレープフルーツ泥棒 那美の水着がぴったり合うなんて、知り合ってから10年近く経つが意外な発見だった。

奈津は膝を抱えて顔の傍らにしゃがみ込む満里の方に顔を向けるこ

とはできなかった。

「あれ、奈津もついいの？遠慮しないでもっとゆっくり楽しんでればいいのに」

奈津が掘り出されたところに梅男が通りかかった。手には俄かに薄黄色に染まった液体の入ったペットボトル。

奈津は先ほどの梅男と富田の会話を思い出す。レモンジュース！

「あ」

短く声を出した梅男。奈津は梅男からペットボトルを奪い取り、勢い良く口に含む。

奈津は一瞬動きを止めると、含んだ時以上の勢いで液体を吐き出した。

「ぶー！」

「ちょっと梅男、何であんなもん持ってたのよ」

レモンジュースを取りに行った梅男は、厨房で切らしてしまった酢を隣の海の家から調達して戻る途中だった。

「しょうがねえだろ。おれん家で切らしちゃったからお隣さんにもらってきたんだよ」

夏の稼ぎ時に家の手伝いを免除してもらっている手前、梅男はお使いを はいはい と素直に引き受けた。

先ほどまで真上から照り付けていた太陽は、やや角度を緩めて浜辺を照らす。

刺すような日差しやゆらゆらと漂う熱気は少し優しさを帯びていた。

奈津はまたもや砂浜の上に横たわっている。海水を飲むと死んでしまうという話を思い出す。お酢はどうなんだろうか。すぐ吐き出したから大丈夫だね。と自分に言い聞かせる。

青空を見上げながら過ごす夏。

声をあげ、走り回りながら過ごす夏。

波と戯れながら過ごす夏。

甘酸っぱい夏。奈津の場合、酸っぱいだけだが。

夢のような時間はあっという間に過ぎていく。

「いやー、食った食った」

「ほんと、あんた食べすぎじゃない？」

腹をさする富田に満里が言う。

「百貫デブだからな」梅男。

「百貫もないわ！」百貫が何kgあるのかはわからないが、デブの部分は否定しない富田。

夕暮れまで海で遊んだ6人は、今度は紺が家族で経営する民宿「安房」にお世話になる。

民宿安房は、一見すると普通の民家と変わらない佇まい。しかしおもてなしも温かく、アットホームな民宿だ。

海水浴場から歩いて5分、水着で海へ行つてそのまま帰つてこれる好立地。

梅男の海の家で遊び、紺の民宿で泊まり、信が獲ってきた魚を富田の父親が調理する。そしてその料理が今まさに6人の前に並べられた。

お金なんてかけなくてもいい。心をこめて迎えてあげる。それだけでもてなしの心というのは伝わるものなのだ。

入浴を済ませた一行は、風呂上りツヤツヤの鼻をてからせながら豪勢な夕食を平らげていた。

「夏祭りの日だったら、俺とじーちゃんで作った花火見せられたんだけどな」

1人催し物が出せなかった晴。

「ほんと残念。じゃあ、来年は花火に合わせて来るわ」

「来年も来るの？」

「もちろん来るわよ。来年は伊勢海老が食べたいわね」

「ゲンキンなやつ」

「あら、素直って言ってよね」

満里はそう言うと、窓から外を眺める。陽はとくに沈み、暗闇の向こうから波のうねりが聞こえてくるだけだ。

「来るわよ。来年も。再来年も。ずっと、ずっと。。。」

浜辺に打ち寄せる漣とリズムを合わせるように満里はその言葉を繰り返す。寂しそうに見えるその横顔を、奈津はぼんやりと眺めていた。

「痛たたた。。。」

「房総の陽射しをなめてるからだ」

布団にうつ伏せになり、呻き声を漏らす満里に梅男が言う。

真夏の太陽を一身に受け止め、満里の背中では合成着色料のふんだんに使われたウイナーのような色になっていた。

「梅男、あんたはこっち来るんじゃないわよ」

「何もしねえよ」

「いいから、とにかく近づかないで」

部屋の入り口から一番遠い場所の満里。その隣では、奈津が霧吹きで満里の背中に霧吹きで水をかけ、団扇で扇ぐという動作を繰り返していた。

浴衣を腰まではだけたその状況で、奈津はなるべく満里の背中を見ないように目を逸らしている。油断をすると瞼の裏に焼きついた満里の水着姿が浮かんでしまう。

「満里、いつ帰るの？」奈津の隣に自分の布団を敷きながら晴が聞く。

「明日。明日の昼くらいに出るわ」

「明日？！もう帰るの？」晴の隣でシーツを整えていた富田が手を止める。

「この部屋1週間取っちゃったよ？」富田の隣の紺。やることがいっぱいも極端だ。

「わたしはどれだけ暇人なのよ」

「そんな急に帰るって言われたら、これも、これも、これも予定変更じゃなか」

梅男は「旅のしおり」と汚いで書かれたノートを開き、ばんばん

ばん と叩きながら一番遠くの布団から満里に迫る。

満里はうつ伏せのままノートを受け取ると、ぱらぱらと開いていく。表紙には『たびのしおり』と汚い字で書かれている。

「梅男」

夏のしおりを閉じ、枕元に置く。

「どうだ。帰りたくなかっただろ」

梅男が胸を張る。

「なんで運動会みたいになってるのよ」

隣の奈津に、スケジュールの一部がちらつと目に入った。ビーチフラッグ、ビーチバレーから始まり、ビーチ騎馬戦だとか、ビーチ棒倒しとかいう文字があったような無かったような。

「梅男、0点」

満里のダメ出しに富田が点数を付けると、他の面々も好き勝手言い始める。

「女心がわかってない」

「脳みそまで筋肉」

「筋肉生命体。。。ぐっ」

梅男が富田の背中に跨り、キャメル・クラッチを極める。富田の体が名古屋城の鯨のように美しく反る。

紺がレフェリーとなり二人の脇に滑り込むと、富田の顔を覗き込む。富田は目を白黒させながらも、首を細かく横に振る。

二人の間では、

「ギブ？ギブ？」「まだまだ、まだまだ」

というプロレスさながらのやり取りが行われているのだろう。

梅男は大げな動きでキャメル・クラッチに力をこめる。

部屋はいつもの如く動物園のような騒々しさとなる。

それは冬の雪山のペンションにいても、夏の海辺の民宿にいても変わることは無い。

ペンションで野球まがいの事を始めて大騒ぎしたときには、さすがに満里が怒鳴り込んで来たが。

「騒がしいなあ」

今日の満里は笑い転げるでもなく、怒鳴り込むでもなく静かに微笑みながらその様子を見守っているだけだった。

「。。。ま、ちょうどいいけど」

満里が小さく付け加えた一言は、富田の悲鳴に掻き消され、奈津以

外の耳には届かなかった。

ごーん

富田がギブアップすると、遠くの寺で鐘がなった。それはちょうど試合終了のゴングとなり、それをきっかけに部屋は静かになる。

泣いているのか、布団にうつ伏せになったままの富田を除いて5人はスケジュールを決め直す事にした。

「この、雀島って何？」

運動会の競技一覧が書き並べられた中、一際異彩を放つ「雀島探検ツアー」と書かれた項目を満里が指差す。唯一運動会っぽくないプログラム。

満里の指し示したものは、地元の住人しか知らないプライベートビーチ、「雀島」。

南国かと思うほどの情緒豊かな風景で、浜辺の写真で絵葉書を拵えてもそれが国内であると判断するのは難しく思える。

晴がその説明を進めて行くに連れ、満里の目は輝いていく。明日の予定に異論を挟む余地は無くなった。

翌日の予定が決まると、遊び疲れたのだろうそれぞれが布団に横た

わり、発せられる言葉も疎らとなった。

眠ってるんだかいじけてるんだかわからない富田。

それ以外の5人も房総の太陽光線をふんだんに吸い込み、その身を倍にして包み込む布団の中で静かな寝息を立て始めた。いや、静かでもないか。

「んがー」

「ぐがー」

目を開けると満里は暗い部屋の中にいた。

息苦しく、ドス黒い空気が充滿している感じ。

一歩足を前に踏み出しても、進んでいる感覚は得られない。

声を出そうと腹に力を込めるが、喉は何かで栓をされたように声が出ない。

ふいに、背中に刺すような痛みを感じる。

思うように動かない体に鞭打って何とか背中を見る。ブサイクな三毛猫が満里の背中に爪を立ててぶら下がっていた。

ちょ、、、ちよつと、やだ、、

根拠は無いが、富田の家の猫だと直感的に感じた。

振り解こうとすればするほど猫の爪は食い込み、痛みが増していく。

やだ、やだ、やだ、ゝゝ！

背中の猫と格闘していると、いつの間にか富田が目の前にいた。

知っている顔の出現に、満里は安堵し助けを求めようとする。

富田、ちよつと富田

が、富田の様子はおかしい。

気味の悪い薄ら笑いを浮かべながら、黄色いペースト状の何かをバケツの中で練っている。

な、何？富田何やってるのよ

富田は練り上げられたペーストをおたまで掬い上げ、にたゝと笑った。

「からしー！！」

「からしー！！」

自分の声で目を覚ます。

奈津達5人は驚いた顔で満里を見ていた。

布団の上で上半身を起こした満里は、肩で大きく呼吸をしながら周囲をゆつくりと見渡す。清々しいばかりの日差しが差し込み、窓から眺める空はどこまでも青く澄んでいる

満里は首を回し、自分の背中を見る。

猫の姿は無く、昨日身に着けた浴衣の模様が目に入る。

激しく寝返りをうつたのか、背中がヒリヒリと痛んだ。

「からし、、、」

息も絶え絶えに満里が言う。

「か、からし」

満里の言葉を復唱する富田の手には、からしで真っ黄色になった納豆が糸を引いていた。

5人は既に布団を片付け、テーブルに並べられた朝食を囲み、全員が納豆をかき混ぜていた。部屋には鼻にツンと抜けるからしの香りが充満していた。

「満里、ほんとに帰るのか？」

ご飯に海苔を器用に巻きながら梅男が聞く。

「うん」

満里は背中に纏わる悪夢で目を覚ますと、そのまま朝食の卓に着いた。背中の痛みは日焼けというより、猫に引っ掻かれた痛みに感じられるようになっていた。

「残念だなあ」富田は2杯目の黄色納豆をかき混ぜている。

「一ヶ月でも居てもいいのに」相変わらず極端で無謀な紺。

「私はどんだけ暇なのよ」

「じゃあ、次会つのは冬か」晴がかき混ぜた生卵をご飯にかけながら言う。

「。。。うん」

満里はアジの開きをつついていた箸を止めて俯く。

急にトーンダウンする満里に、5人は視線を集める。

「どつたの？」

様子を伺うように梅男が満里を覗き込む。

「。。。ううん」

満里が俯きながら顔を左右に振る。

「ただ。。。」

「ただ？」

「寝不足なだけ」

「ほら富田！お前のイビキがつるさいから」

「それは違う。梅男でしょ」

二人共だよ。

お別れ

5人は昨日決めた予定通りに絶景ポイント「雀島」へとやってきた。正式な名称かどうかはわからないが、地元ではそう呼ばれている。

「どうだ？ すごいだろ」

言葉にならない感動の声をあげる満里に、梅男が我が物顔で自慢する。

飛行機に乗って国外へ出なくても、美しい景色というのはいくらでもある。ここ雀島もその一つだ。

満里は黙って自分の故郷の山を思い出す。

自分の住む桃竜山だって、この雀島に負けなくらいの美しい景色は有ったはずだ。

小さな頃から眺めていて慣れてしまったのか。それとも、心が、目が曇ってしまったのか。

山から見下ろす両手で掬い取れそうな小さな町並。ランドマークといたら大げさだが、あの町で存在感を示す歴史あるホテルはミニチュアのように見えて大好きだった。

そうだ。小さい頃その風景を飽きもせず、日が暮れるまで眺めていたではないか。

辺りが薄暗くなってもお気に入りの岩場に腰掛け、毎日毎日同じ場所から同じ景色を眺めていた。

「違うもん。毎日違うお顔になるんだもん」

完全に日が暮れる前に決まって迎えに来てくれる明にそう言った記憶が蘇る。同じところから同じ場所を見ても、町は一日として同じ表情を見せることは無かった。

そして満里は、ここ何年かのその風景を思い出すことができない自分に気付く。

小さい頃に見た景色は、心の中に鮮明に刻み込まれこんなにもはつきり思い出せるのに。

母が家からいなくなったのもそう。気付くのはいつも遅い。手遅れになってからだ。

満里は誰に向けるでもなく言葉を吐き出し始める。

「海はいいよね」

「うん？」

梅男が短く聞き返すが、満里は海を真っ直ぐ見たままだ。

「山とは違う」

5人は満里の言葉の真意がわからない為、雀島の景色を眺めながら次の言葉を待つ。

青い陣地を二つに分けるように、飛行機雲が空に線を引いていく。その音が耳に届いてこないことをなんとなく不思議に思う。

耳の中を埋めるのは、優しく頬を通り過ぎていく風の音と、一定のリズムで波が奏でる心地良い波音だけ。

「人間がどんなにがんばったって、海を自分の物にすることはできないだもん」

浜辺で遊ぶ小さな子供と両親を見て、奈津は小さい頃に信と母と家族3人でこの場所に遊びに来た時の事を思い出す。

鮮明に覚えているのは、陽が当たらないよう日陰に寄せておいた昼食用の弁当がカラスに持っていかれたことだ。

波打ち際で奈津と一緒に波と戯れていた母がカラスに気付き、慌ててお弁当に駆け寄ろうとした。が、いかんせん距離があり過ぎた。

カラスはから揚げやウィンナーなどおかずの入った弁当箱を選び出し、悠々と上空へ舞い上がっていった。現代のカラスは美味しいものを知っている。

食べ物を奪われたと言うのに、信と母は楽しそうに笑っていた。それがその時とても不思議だったが、楽しそうに笑う両親につられて自分も笑った。

そして、大人になったら二人が何で笑ってるのかわかるようになるのかな、などと子供心に考えたのを覚えている。

言葉を発しない他の5人も、奈津と同じようにそれぞれ思いを巡らせている。長い沈黙の時を、誰一人として気にしなかった。

遙かな空間を越えて飛行音が耳に届いてくると、奈津は我に帰った。なんだかずいぶん長い時間昔の思い出に浸っていたような気がした。

満里の話を途中まで聞いていたことを思い出し、慌てて隣を見る。満里がまさに口を開こうとしていた。

「。。。うちのスキー場、今年を最後に閉山するんだ」

美しい景色がそうさせたのか、満里は自分でもわからない。わからないが、それまで喉元の直前で蓋をされ、押さえつけられていた言葉が驚くほど自然に出てきた。

雀島の景色を眺め、想い想いに頭を巡らせていた5人は一転ものすごい勢いで現実に取り戻される。そして、一斉に声をあげた。

「な”あ”!？」

駅まで送る道中満里は喋り続け、梅男が相槌を打っていた。だが、その相槌も気の無いものになっている。

「知ってる？あの有名なスキー場も、うちと同じように閉鎖って話があったのよ」

満里は国内で冬季オリンピックが開催された某スキー場の話を始めた。

「でも、大好きなスキー場を守ろうって。そこを本拠地にしてるライダー達ががんばったの」

良く晴れた昼下がり。歩いていると、草の匂いが夏の熱気とともに漂ってくる。

「頑張ってたうまくなくて、色んな大会に出ていい成績残して、有名になって、署名を沢山集めて」

そしてその想いは沢山の人々の心を動かし、一度決定された閉山を覆し、遂にはオリンピックも開催されるほどのスキー場へと変貌を遂げた。

「うん」

「ねえ梅男、聞いてないでしょ？」

「うん」

「もう」

奈津は週末でも混むことの無い人の疎らな桃竜山スキー場を思い出そうとするが、すぐにやめた。

どうしていいかわからずに、並んで歩く晴の横顔をちらりと伺う。

困った時、いつも頼りになる存在だった晴が、何か言ってくれるのではないかという望みを持って。

だが、晴に口を開く様子は無く、むしろ口は真一文字結ばれたままだ。

日差しは強く、遙か先を見据えると陽炎がゆらゆらと揺らめいている。考える事を放棄したくなる暑さと急な知らせだった。

一行は満里に気の利いたことは何も言えないまま駅へと到着してしまふ。

外房線の電車がホームへゆつくりと入ってくると、満里が5人より一歩前に出て電車が止まるのを待つ。

空気が勢い良く漏れる音とともにドアが開く。電車に乗り込み、満里は入り口付近でこちらを向いた。

「また、、冬にな」

毎年当たり前のように決まっていたこと。だが、今は状況が変わり、この言葉が喉元に刃物を突き付けてくる凶器のように感じた。

「うん。楽しみにしてる」

あの山で過ごす、最後の冬。誰も口にできない。

奈津は桃竜山出発の日、いつもと少しだけ様子の違う喫茶室の満里と明を思い出す。満里はもっとうずと前からこの事を聞かされていたのだろう。

だが、今の今までこの事を口にしなかった満里の気持ちは痛いほどよくわかった。

駅員が笛を鳴らす。

「ばいばい」

満里が手を振る姿を見て、5人は一瞬息をのむ。

開いたときと同じように勢い良く空気の漏れる音ともにドアが閉まる。

無力

ただその言葉だけが重く全身にのしかかってくる。

ゆっくりと動き出した車両を、奈津は何もできずに見送るだけだった。

水も滴る

夕方の漁を終えた奈津は、川の土手に上がり外房マリンを見下ろす。太陽は西に傾き、空にはオレンジと紺のグラデーションが鮮やかに広がっている。

いつもだったら誰かしらいるウッドデッキも、都会からバケーションにきた奈津達と同年代ほどであろう男女が楽しげに談笑しているだけだ。

あれから3日。奈津はこの時間にこうして外房マリンを覗きに来るが、4人の誰かと顔を合わせることはなかった。なんとなくみんなバラバラになっている。

奈津は川に沿って伸びる道を上流に向かって歩き出す。沈みかけた西日を正面に受けて目を細める。

小さい頃には整備もされず雑草も伸び放題だったこの道路も、数年前にアスファルト舗装された。

道の脇に目をやる。幼いころ家族3人でこの土手を散歩した時のことを思い出す。

「奈津、この世で食えない葉っぱは何種類あるか知ってるか？」

比較的雑草の少ない部分を選びながら奈津が母親と手を繋いで土手

を歩く。その2人の少し前を雑草などお構い無しに信が歩く。

「んー、わかんない。1200」

それを聞いて母が吹き出す。

「どっから出てきたのよその数字」

信は道端の草を2本引き抜く。茎の部分の皮を軽く剥がすと、そのうちの一本を奈津に渡す。

「なんと、3種類しかないんだと」

真偽のほどは定かではなく、むしろ疑わしい内容の蒔蓄を口にしながら信は茎の太い部分を齧る。奈津もそれを見様見真似で齧っている。

口の中に広がる酸味に堪えきれず、顔を顰めて渋い顔をする。

「あら、あら、あははは」

オレンジ色に染まる川の出てに3人の笑い声が鳴り響いた。

昔齧ったものと同じ植物を徐に引き抜く。あの時の信と同じように皮を軽く剥いでいく。

齧る前から口の中に酸味が広がり、唾液が溢れ出してくる。

植物の名前は、たしかスカンポ。

スカンポの茎を齧る。酸味が口の中に広がる。顔を顰めるほどの酸味ではなかった。

「おう、奈津」

ふいに呼びかけられ、後ろを振り向くと紺がこちらに向かって歩いて来るところだった。

「紺」

「何してんだ？こんなところで」

「いや、ちょっと散歩を」

「ふーん」

紺は奈津の手にしている植物と、道端で短くなつた植物を見比べる。

「俺こないだこの辺で小便したから、やたらと触らない方がいいぞ」

口に含んだスカンポの汁が勢い良く飛び出した。

「ぶー！」

どこへ向かうでもなく土手を進んだ紺と奈津は、川辺に降りる階段に腰掛ける梅男、富田、晴の姿を見つけた。

「うわー。澱んでるなー」

階段に腰掛ける3人のどんよりした背中を見て紺が独り言のように呟くと、路面の舗装とあわせて整備された川べりに続く階段を降りて行く。

何の祭られごとか、階段の脇には巨大な岩が置かれ、藁を束ねた縄がぐるっと一周されている。

誰も手入れをしてないのだろう、風雨にさらされみすばらしくなった紙垂がその縄にかろうじてぶら下がっていた。

「3人揃ってなにやってんだよ。こんなところで」

3人は首だけ振り向けて土手の方を見上げる。そこで偶然一緒になつてさ、と富田が返事を返す。

奈津と紺は階段を数段降りると、3人に倣って石段に腰掛ける。気まずさがそうさせるのか、それぞれ同じ段には座らず低いところから梅男、富田、晴、紺、奈津の順番に座った。

陽はすっかり暮れ、蝉の声も疎らになる。それっきり誰も口を開かないから水面に跳ね上がる魚の水音が驚くほど良く耳に届いた。ぱしゃん。

上空では無数に輝く星に交じり、一定間隔で点滅する飛行機の灯りがはつきりと見えるようになっていた。

梅男が傍らの小石を川に向かって投げる。間抜けな水音が鳴ると、

そこを中心として滑らかな円が広がっていく。

梅男に続いて富田も石を投げる。梅男の時よりちょっと高い水音が鳴った。

紺、晴も続く。そして奈津も。波紋はいくつにも重なり、ぶつかり合い、先ほどまで穏やかだった水面が漣立ち、乱れる。

5人の心の中を表現するならば、丁度こんな感じになるのであろう。手の届く範囲に手ごろな石がなくなると、梅男が立ち上がる。そして、土手の傍らに祭られてある巨大な岩に手をかけた。

高さは梅男の身長と同じくらい、横は大の大人が両手を広げて漸くその円周の半分に至ろうかというほどだ。

「ぬあああああ！」

梅男は雄叫びと共に力を込める。梅男の腕に筋が立ち、血管が浮き上がる。

重力の抵抗も虚しく、岩はついに頭上へと抱え上げられた。4人とも、岩の重量を数値で測ることをやめる。

富田は後ろを振り返り、晴と目線を交錯させる。言葉ではなく、アイ・コンタクトで会話をする。

（いつも思っただけどさ）

（うん）

（人間、だよな）

(多分)

「どりゃああああ！」

怒号とともに放り投げる。岩は放物線を描き水面へと飛んでいく。

奈津は小さい頃に行ったデイズニーランドの某アトラクションを思い出す。

そのアトラクションに乗り、どのような結果になったのかは明確に思い出せたが敢えてその場から動くことはなかった。

大量の水に打ちひしがれるのも悪くない、と思った。

ずどーん。

軽く地面が揺れたような気がした。いや、実際に揺れたのかもしれない。視界が一瞬揺らいたあと、大量の水が舞い上がる。辺りはスコールに見舞われたような状態になる。

奈津はたじろぐことなく舞い降りてくる水をその身に浴びた。その冷たさが心地良かった。

さすがの梅男も今回ばかりは肩で息をしている。

4人は「なんで？何で投げた？」と無駄な問いかけはしない。

「投げる石がなくなっただから」

と返ってくるのはなんとなくわかったからだ。

呼吸が整わないまま、梅男はくりとこちらを向く。

「行くぞ」

短い言葉だったが、久しぶりに梅男の人間語を聞いた気がした。さつきからうおーとかどりゃーとか。

その短い人間語を口にした梅男は階段を上がっていく。

4人も大きく波打つ水面を背に重い足取りで土手を上がり始めた。

「あれ、梅男」

梅男の家は左の方向にある。奈津が梅男に声をかける。が、右に向かう梅男はそれには応えずに歩き続ける。

「何でお前ら何も言わねえんだよ」

梅男の問いに誰も答えなかった。人のいなくなった土手には5人の足音だけがしっかりと鳴り渡る。

「お前ら、見たことあるか」

4人の応答はない。かまわずに梅男は喋り続ける。

「俺は初めて見たぞ」

それでも誰も答えない。それでも梅男は喋るのをやめない。そして
どんだんどんだん歩いていく。

「あんなん見せられたら、やるしかないだろ」

それでも誰も何も言わない。代わりに、富田と紺が顔を見合わせる。
そして段々と気持ち悪いにやけ顔になっていく。

ここにいる全員が、梅男の言わんとすることをわかっているから。

5人は、誰からともなく早足になる。奈津も嬉しくて笑顔になって
いく。

なんだ、やっぱりみんな同じこと考えてたんだ。

気がつけばいつの間にか走り出していた。そう、この道の先にある、
外房マリンに向かって！

入り口のドアが勢い良く開き、水を滴らせた5人が外房マリンに雪
崩れ込む。

「那美さん、ウェイク1丁！」富田が人差し指を立てて叫ぶ。

「ちょっと、何！？」デスクで事務処理をしていた那美は驚いて立
ち上がる。

「ボート貸してくれよ！」梅男が勢い余って前のめりにカウンター
に両手を着く。

「だから、なんなのよいきなり」

「那美さん、俺達ウェイクやることにしたから」晴が続ける。

駅で満里が5人に初めて見せた涙。山育ちだろうが、捌けた性格だろうが、やっぱり女なのだ。生まれ育った場所がその役目を終えると聞いて平気で笑っていられるわけがなかった。

涙をこらえ、必死に笑顔を作ろうとする満里のくしゃくしゃな顔は、5人に断固たる決意をさせるものとしては充分過ぎるほどのものだった。

那美は決意に満ちた5人の顔を順番に見回す。

「そんなの、無理に決まってるでしょう」

梅男が那美に詰め寄る。

「何で！」鼻先と鼻先がくつついた。それでもたじろぐことなく梅男の視線を真っ向から受け止める。

近距離でしばらく視線を激しく交錯させた後、那美は梅男から視線をはずして後ろに並ぶ4人の顔を順番に見る。皆同じ目をしている。

那美は肩の力を抜き、窓の方へと歩いていく。そして、ブラインドを開けた。ビャー！

「外はもう真っ暗。ウェイクボードは、太陽の下でやるものよ」

こうして、「俺達のスキー場を取り戻せ」大作戦は始まった。

スノーボードで日本一になって、自分達のスキー場を取り戻す。雪山の借りは雪の上で返すのだ。

そうと決まれば冬も夏も秋も春も無い。雪の上だろうが水の上だろうが人工芝の上だろうが、板の上に横乗りし、ひたすら滑り続けるのだ。

根拠なんてどこにもない。常識？確率？可能性？そんなものは考えるだけ無駄だ。

自分たちにできることに、全力でぶつかっていくだけだ。

「わーっしょい！わーっしょい！」

穏やかな川の水面が満月と無数の星を映し出す中、5人は外で胴上げを始めた。宙を舞っているのは奈津。

何か嬉しいことや楽しい事があったときの儀式のようなものだ。

「奈津！てめえ！胴上げされる奴は万歳しろ！」梅男に叱咤され、宙を舞いながら両手をあげる奈津。別に好きで宙を舞っているわけではないんだけど。

「わーっしょい！わーっしょい！」

進んで飛んでるわけではないが、本気で嫌だと思っているわけでもない。5人全員の心が一つになった時にこの胴上げをしてきたからだろう。

奈津は何回か宙を舞った後、満月をきれいに映し出す滑らかな水面へと放り投げられる。

ちゃっぽーん。

川の大きさを考えると、取るに足らないくらいの小さな水しぶきが立つ。

だがその小さな水しぶきも、さざ波を立て、向こう岸にたどり着き、自信はまた元の場所へと舞い戻ってくる。

いくつもの漣は重なり合い、やがて川全体を揺らしていく。

そうだ。

スキー場閉山という大きな川の流れも、今ここに立った5人の小さな漣から始めるのだ。

先ほどから水をかぶりっぱなしの奈津。それでも今の気分を言葉にするのならこの二文字。

最高だ。

* * * * *

* *
* *
* *
* *
* キ
* リ
* ト
* リ
* *
* *
* *
* *
* *

はいどーも
あいもーど

ほっしーです。

ここまで読んでくれてどうもありがとうございます。

この続きはちゃんとあります。 ちゃんとかどうかはわかりませぬが、
あります。

もし「もつとよみてえ」と不覚にも思ってしまった方々は、コメン
トでもメッセージでもいただければ読める場所をご案内します。

まってるよーん & a m p ; # 9 7 8 6 ;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4159e/>

ぷらっちなむ・ボーイズ

2010年11月14日09時33分発行